

# 私の戦中と戦後

— 戦争、二重障害、不就学の道を歩んで

藤野高明さん



ふじのたかあき／1938年福岡県生まれ。大阪府在住。元大阪市立盲学校教員。全日本視力障害者協議会（全視協）事務局長、会長を歴任。2002年NHK障害福祉賞「人と時代に恵まれて」で最優秀受賞

私は1938年12月に福岡県福岡市で生まれました。今年で85歳になります。

物心ついた頃から戦争は日常でした。戦争してない国があるのかと親に聞いたことがあるくらいです。戦争は怖いけど仕方がないもんやという感じでした。そんな私の戦時体験は二つあります。一つは空襲で、もう一つは教育です。

教育は、学校の先生にこの戦争はアジアの人たちを助けるために戦っている良い戦争だということ、日本は神様の国だから必ず勝つと教えられていました。小学1年生だった私はいつか勝つんだと本当に思っていました。

空襲は、空襲の時だけが怖いわけではないんです。防空警報には警戒警報と空襲警報の2種類があつて、警戒警報は注意しなさいよとサイレンが長く鳴り、空襲警報は急を告げる気味で、いつ警戒警報が鳴つていつそれが空襲警報になるのか「えずかねー（怖ろしいね）」と怯えていました。天気が良くて空が青くてもいつも何か不安がありましたね。

1945年6月19日の福岡大空襲は、夜の11時頃に防空警報が鳴りました。アメリカの爆撃機B-29が239機、佐賀県の方から県境の背振山を越えて福岡市上空に入ってきて、人がたくさん住んでいる福岡市の海沿いの街を爆撃し始めました。爆弾が落とされる重低音が鳴り響き、北の方の空が真っ赤に焼けて、私の家の地域まで爆撃機が来るかもしれない

と防空壕に入りました。時々ドーンという音がして、「あの音は何?」と聞いたら父が、飛んでいる飛行機を地上から撃ち落とす高射砲の音だと教えてくれました。「じゃあそれで撃ち落とせるん?」と聞いたら、「飛行機が高いところを飛んでるから当たらんばい」と言されました。子どもながらに当たってほしいなあと思っているのにそう言われて本当に怖かったです。空襲はおよそ2時間続き、やがて北の方から焼け出された人たちが真っ暗闇の中を歩いてきました。母は玄関の戸を開けてその人たちに水をあげていました。

数日後、学校では5、6年の男の子たちが、敵討ちにアメリカの捕虜を何人も撃ち殺したんだと自分が殺したかのようになつてました。飛行機に乗っていた兵隊たちは逃げていったのに、何もしていない捕虜が殺されるのはかわいそうだと思いました。そのことを帰つてから母に話したら、「高ちゃん（高明）そんなこと外で言うたらあかんよ。スパイと間違えられてお父さんとお母さんが警察に捕まるからそんないることは言わんよ」と言されました。これが私の戦時体験です。

## 二重の障害を負つたあの夏の朝

私は全盲で、両手先がありません。両目の視力と両手は戦後、不発弾の暴発によって失いました。戦争が終わって11ヵ月後の、1946年7月18日の朝のことでした。

小学2年生の私は近所の子どもたちと、学校の近くを流れる川の川岸に捨ててあった単4電池大で銀色の筒状のものを、それを不発弾とは知らずに拾つて帰りました。翌朝、不

発弾の穴が開いているところから黄色い砂粒みたいなものが落ちてくるので、きれいにしようと思つて釘を差し込んだらそれが引き金となつて爆発が起きました。一緒に遊んでいた5歳の弟の正明は即死でした。その不発弾はアメリカが落としたものではなく、旧日本軍のものが一般人の手を通して捨てられたものかもしれないと後で知りました。

父は34歳、母は31歳でした。両親の無念と苦痛は相当なものだったと思います。

## 13年の不就学を越えて

障害を負つてからは小学校に行けず、それから13年間も不就学となりました。当時小学校の隣には県立盲学校がありましたが、点字が読めず、按摩・鍼・灸の道もないということでも盲学校にも入れませんでした。

見えると見えないとでは天地の差があります。さらに手がないというのは重度の障害です。一つの障害があつても大変なのに、二つの障害があることはさらに大変です。その大変な人と家族に対して二つの障害を根拠にして学校に入れないという制度も、その制度の中で働いていた教職員にも私は責任があると思います。学校に行けなかつたことが一番つらいことでした。

そんな子ども時代を過ごしましたが、いつか手術したら目が見えるようになると眼科のお医者さんたちから言われていたことが私の生きる希望でした。それで15歳から5年間入院して、はじめの3年間で12回手術をしましたが視力は回復せ